

## 再起をかける

佐藤 義弘

そこには、ただ静寂な空間が広がっているだけだった。時折、澄んだ空気の中に小鳥のさえずり声心地よく響いてくる他は、音らしき音は、全くと言っていいほどに聞こえてはこなかった。

朝、彰男は目を覚ますとおもむろに窓際のほうに歩み寄り、外を眺めていた。まだ寒さが肌身を刺す、三月上旬のことだ。そのあまりの静けさと、昨日突如発生した大地震の異常なまでの荒れ模様との落差を、彰男は、まだ自分の中に容易に受け入れられずにいた。

事が起きたとき、彰男は社内の設計室で備え付けのパソコンに向かい、プリンターの部品図を描いていた。そのときである。いきなり足下が中に浮いたような感じにして平衡感覚を失い、次の瞬間、間髪を入れず体が左右に大きく揺れ動かされたのは。事態がただ事でないと感じ取った彰男はもつれそうになる足を何とか前に踏み出そうとしながら、必死に正面玄関のほうに向かって歩き始めていた。

異変が起きてから、時間はどれほど経っていたのかはわからない。辛うじて正面玄関までたどり着いた彰男は、ふっと外に目を向けた。そこで目にしたものは、すでに避難を済ませている数十人ほどの同僚達の姿だった。皆強ばった表情をしていて、またいつ来るとも知れない揺れに恐怖感を抱いている様子だった。

時間が、まるで止まっているようにも感じられた。事が起きるわずか十数分前は誰もが社の業務を通常通り淡々とこなし、機械もフル稼働していたというのに。あまりの変わりように、彰男はただその場に呆然と立ち尽くしているだけが精一杯の状態だった。

地面を、地の底からとてつもない力で突き上げるようにして起こる揺れは、およそ五、六分近くは続いただろうか。あれほどの長い揺れを体感したのは、彰男は後にも先にも、それが初めてのことだった。社の前には道路が走っていて、そこには数人ほどがしゃがみ込み、何やら地面の辺りを食い入るようにつめていた。それに引き寄せられるように、彰男も恐る恐るその方向に足を運び始めた。

道路までたどり着き、目に飛び込んできたのは、長さ四、五メートルにも渡る横

長の亀裂だ。しかもその開口部は幅十センチメートルにも達していて、深さはおよそ三十センチメートル近くは優にあっただろうか。今回の地震の規模がいかに大きかったかを、それは如実に物語っていた。社内のあらゆる機能が完全に麻痺したことにより、社員は、解散命令が出た時点から期日未定の一時帰宅を余儀なくされた。従業員不在となった社は、完全に生産力ゼロの蛻の殻同然と化した。室内の床面には書類が至るところ散乱し、見る影も無く、痛々しいほどの様相を呈したのである。地殻内部に溜まっていたエネルギーが外部に放出されたことにより、今は、大地も休息しているかのように穏やかだ。地面の奥底からその寝息が聞こえてでもきそうな感じがするのだが、それが何とも不気味極まりない。

昨日の地震発生を境として、まるでこの世が変わってしまったように感じたのは、彰男一人だけではなかっただろう。それぐらいに、今回の地震は多くの人に計り知れない衝撃と、心の痛手を負わせたと言っても言い過ぎではなかった。

I市内全域は、地震発生直後から電気、水道などライフラインが完全に途絶え、不自由極まりのない生活を強いられることとなった。生活の要を奪われては、羽を失った鳥も同然となってしまった。いったん歯車が狂い出すと、その影響は至るところに波及していき、それは個人、さらには社会へと広がりを見せた。固定電話、携帯電話などが使用不能となり、身内に連絡を取りたくても、取れない状況がしばらくの間続いた。

その後通信網が回復したのは、地震発生から二日後のことだった。

「もしもし、聞こえる？」

「…聞こえるよ」

受話器から、絞り出すような声が聞こえてきた。母親の無事が確認できた瞬間でもあった。

「皆、怪我は無かった？ 家は大丈夫？」

矢継ぎ早に言葉が、口元から衝いて出てくる。

「大丈夫、元気だよ」

やややつれた感是否めなかったが、確かに母親の声であると知ると、彰男は安堵した。すぐにでも飛んで帰ってやりたいところだったが、途中道路が土砂崩れで寸断され、帰省できる状況にはなかった。暗闇の中、ろうそくの火を灯しながら一人恐怖に怯えじつと堪え忍んでいる母親の姿が、脳裏に浮かんできた。

平静だった日々が一瞬のうちに失われ、変わって、心穏やかならざる日々の到来となった。これまで、何ら先行きも考えず場当たりの生活をしてきたことが、彰男にはやけに悔やまれてならなかった。

震災後、水道の蛇口からは一滴たりとも水が滴り落ちてくるようなことはなくなった。つい数日前なら、それこそ蛇口からは溢れんばかりの水が出ていたというのに。

切迫した状況に置かれると、何故にもっと水、その他もろもろの資源を大切に使用できなかったのかという思いが、彰男の中にじわり、じわり沸いてきた。

生きる上で必要不可欠な、水資源。その水が、今や手に入らなくなってしまっているという現実。その切実さ。体が、生理的欲求としての命の水を求め、奔走し始めようとしていた。

彰男は不意にその場を立ち上がると、外に向かって歩き出そうとした。と、そのときだ。動き出し始めた足が、途端にその動きを止めた。車の燃料がタンクにわずかしか残されていないことに、端と気が付いたのだ。しかも運の悪いことに、ガソリンが、生憎供給元である店から入手困難となっていたのだ。何もかも今回の巨大地震が事の発端なのだが、大津波がエネルギー源となっていた原子力発電所施設を一気に飲み込み、それにより稼働中だった三つの各原子炉は自動停止、全電源喪失状態に陥った。結果爆発を引き起こして、そこから、恐るべき放射能汚染が引き起こされたのである。運搬業者は目に見えぬ放射能の恐怖に怯え、福島に足を踏み入れることをことごとく拒んだ。それゆえの、今回の燃料枯渇である。生きていながら、生きている心地がなかった。それは食料とて、同じことだった。レジには長蛇の買い物が並ぶも、肝心の食料が、底をつき始めていた。

その頃、テレビからはリアルタイムで原子力発電所事故の様子が伝えられていて、その映像に映る町中に、人影はまったく見当たらなかった。あれほど頻繁に走っていた車も、その姿を消した。何もかも想定外のこと現実世界の中では引き起こされていながら、国は、事の集束に後手後手の対応をするので精一杯だった。

#### 余震（四・一一）

大地震発生から、およそ一ヶ月あまりが過ぎた。人々は、ようやくありのままの

負の現実を受け入れ、わずかだが、復興に向け歩み出そうと動き始めていた。彰男の勤める職場もその頃、遅ればせながら通常の業務ができるまでに機能回復を果たしていた。

彰男はその日の仕事を終えると、いつも通りマイカーを自宅方面に走らせていた。が、その途中から、急に雲行きが怪しくなり始めてきた。そうこうしているうちに、直雷が鳴り出した。地面を叩き付けるような雨が、激しく降ってきた。フロントガラスからの視界は、ほとんどゼロに近い状態だ。ワイパーの動きを最大限にするも、それも効は為さない。為す術もなく、車内で、じっと身を潜めるだけの状況がしばらくの間続く。しかも車は、一向に前に進みはしない。燃料を無為に浪費したくないがために即エンジンを切り、ラジオの音だけに耳を傾ける。情報は取れているが、何か閉じ込められたような圧迫感の中で過ごす彰男なのだ。

突然、前方上空に青白い光が斜めに走った。次の瞬間、間髪を入れずに地の底まで届きそうなほどの激しい雷音が鳴った。それから、何秒も経たなかったであろう。すぐ脇にある電信柱が、急に左右に動き出した。続いて目の前の道路も、波打ち始めてきた。その直後だ。下から車が突き上げられ、いきなり、車体が左右に揺れ動いたのは。地震の再来だと、彰男は直感した。

(早く、止まってくれ！)

車内の密室で、一人ただ一心に祈り続けることしかできない。

幸い、その後揺れはほんの十数秒ほどして収まった。一時期激しい荒れ模様が続き、そのせいで、帰宅までには通常の倍以上の時間が掛かってしまった。時刻はその頃十九時を過ぎていて、実家で独り暮らす母親のことが、彰男はふっと気になりだした。すぐに手持ちの携帯電話を取り出し、連絡を入れた。が、生憎の不通で安否確認ができない。

時間はそれから、十数分ほど経った。県外在住の弟から彰男の元にメールが入ったのは、丁度その頃だった。

「全国版のニュースで、T町で、かなりの土砂崩れが発生していると伝えてるよ。

母親は、大丈夫？」

その報せに、彰男は一気に青ざめた。実家に連絡が取れないもどかしさに、彰男は益々苛立ちを募らせていた。

次の日の、朝を迎えた。午前六時。彰男は無意識のうちに携帯電話に手が伸び、実家に連絡を入れた。幸いにも電話は繋がりに、母親の声、受話器から聞こえてきた。無事であることを確認し、ほっと胸を撫で下ろしたのである。

だがそれも束の間、母親は思いも寄らぬ現実を口にした。それは昨晚、彰男の実家からおよそ二キロメートルと離れてはいない場所で津波のような土砂崩れが発生し、その災害で、隣接する二世帯が家ごと押しつぶされ、不幸にも女子校生を含む三人が死亡、三人が重傷を負ったというのだ。近くに住む助かった人の証言によると、裏の杉林が急に動いたと思った瞬間、一気に山からの土砂が雪崩のように流れ落ち、平地にある家を瞬く間に飲み込んでいったのだという。

昨夜、連絡が取れずにいた頃、実家のほうでは大変な騒ぎになっていたのだと知って、愕然となった。過去に、これに近い天災はあったというのだが、時間が経つにつれ危機感が薄れ、安全対策がないがしろにされていったことは否めない。今回のような崩壊は、あるいは、何もかも新しいものに生まれ変わるためには、少なからず必要だったことなのだろうか。

湿気が肌にまとわりつく感じの鬱陶しい梅雨がしばらくの間続いたかと思うと、六月の終わり頃から、強い日差しが連日地面には降り注いだ。その日、彰男は仕事を終えアパートに戻ると、いつになく疲れが体に蓄積されていると感じた。余り物で夕食を済ませると急に睡魔が襲ってきて、彰男は夢遊病者のような恰好で寝室に転がり込む羽目になった。

意識が無くなったのがいつ頃からなのかは、定かではなかった。寝に付いているようで、そうではないような不思議な感覚の中にあつた。

『繰り返し繰り返し、彰男は執拗に妻の沙智子の柔肌にも自らの体を押し当てていく。それは今にも彼女の体内奥深くにまで分け入って、入り込んでいきそうな勢いだ。同じ人間でありながらその実明らかに異なる体と体が、激しく絡み合っている。何物かをむさぼるように、荒々しく求めていく彰男。もはや人間の男というのではなく、動物の雄と化している』

無性に、人恋しかった。心が、どうにも満たされはしなかったのだ。その行為の最中、何故か脳裏には今回起きた地震・津波、放射能汚染による現場の悲惨な状況が鮮明に浮かび現われてきて、己のそういう荒々しい行動を取らせる原因はそれらが起因しているのではないか、とさえ思えてきた。そういうマイナス要因を補

い払拭でもするかのように、彰男は自らに宿った生命力をフルに發揮して、本能の赴くままさらに妻の中に自らのエネルギーをありつけたけ注ぎ込む行為を繰り返し続ける。多くの犠牲者に取って替わる、新しい生を生み出すための営み。そこは誰も立ち入ることの出来ない、二人だけの世界…。

心地良い音色の電子音で耳元を刺激され、ふっと目が覚めた。枕元には馴染みの目覚まし時計が置かれていて、それからの音なのだ、直わかった。つい数時間ほど前、仕事から帰ってそのまま寝室に転がり込んでしまったことを今更のように思い出した。彼女との行為は、そのとき見た夢の中での出来事だったのだと、改めて気がついた。彰男の傍らに、誰も居はしなかった。それは、思い起こせば数年前の出来事になるのだが、あんな濃密な時間を共に過ごしていたときもあったのだなと思うと、その当時に無性に懐かしくなってきた。が、その反面、今更思い出したくない過去という認識が彰男の中には根強くあるのも事実で、それを思うと、逆に腹立たしくさえなってきた。それは今回、津波や地震で家族を失った人と原因は違えど、結果的には同じ痛みを伴っているようにも感じられ、なお切なくなった。忘れようにも、頭の中に頑固にこびり付いてなかなか忘れられない、過去の忌まわしい記憶。哀しいかなそれは、容易に彰男の中から消え去ってなどくれはしなかったのである。

週末、土曜日の午後になった。

(嘘でもいいから、まだ関係が良好だった頃に、戻れないものだろうか)

彰男は、見渡す限り太平洋が広がる浜辺を潮風に吹かれながら一人ゆったりとした気分で歩き、ふっと、そんなことを考えていた。まるでそれは、修行僧が無心に祈りを捧げそれがあたかも叶えられでもするかのように。今現在彰男が立っている場所は、過去に沙智子と共に散歩をし、そして今回、不幸にも津波の被害をもらって受けた場所でもある。以前は綺麗に舗装されていた駐車場も、今は無惨にも至るところひび割れを起こして、駐車できない状態だ。大地は傷付き、彰男自身も、多少なりとも心の痛手を受けた。二連休あるうちの初日で、精神的には、少なからず心安らげるひとときでもあったのだが。つい数日前に見た夢の中での出来事が、いまだに頭から離れないでいるのだった。今この瞬間、あの頃の状態に戻れないものか。そういう奇跡が起こってくれるのを微かながらに期待したが、否現実問題として、

それは起こり得ようはずもなかった。

彰男は気の赴くまま、遙か遠く彼方を望み見ながら当て所なく、さらに先へ先へと歩を進め、歩き続けた。

時間だけは、いつもと何ら変わりなく、ただ静かに流れていく。幾分か疲れの残る体には、潮風が何とも心地良い。

と、その前方に、彰男は老夫婦が子犬を連れて歩く姿を見かけた。そのたわいもない姿に、ふっと自分の遠い将来像を重ね合わせてしまったのである。

(自分はこれから、生活を共にしてくれる相手と巡り会うことができるのだろうか)

そんな不安感が募る一方で、片や海からの潮風が彰男のこれまでの嫌なものを綺麗さっぱり洗い流してくれたのか、気持ちちは、いくらか楽になってきた。

(寄り添い、癒し合える相手が欲しい)

彰男は、心底そう思った。そうしているうちに、自らの内から新たななる行動を起こすべくエネルギーが沸々と沸き上がってくる前触れのようなものを感じ始めていた。

振り返れば、彰男と沙智子はある知人を介して知り合い、一年ほどの付き合いを経て結ばれたのだった。お互いに世間一般よりはやや遅い結婚だったのだが無事に家庭を持つことができ、そのことに、当初はこの上ない喜びを感じていた。結婚して二、三ヶ月間は毎日が新しい発見の連続で、愛情たっぷりの妻の手料理はその日の仕事の疲れを大いに癒してくれた。その頃二人は共働きをしていて、お互いの協力無くしては生活が成り立たない状況下にもあった。彰男は、コンピュータの周辺機器を取り扱う会社の技術者。一方の沙智子は、市役所勤めの公務員だった。

一組の男女が偶然なる出会いのち愛を育み、結婚して、子どもが生まれる。大抵のカップルが辿り得る、ごく一般的な過程とも言えただろう。そんな彰男達も、結婚二年目にして目出たく我が子を授かったのである。女の子だったのだが、暑い夏がようやく終わって、日増しに秋の気配が感じられつつある九月初旬のことだった。そろそろ生まれるからというので一目散に車で病院に駆けつけると、正面玄関から、一気に二階の病室へと駆け上がった。そしてガラス窓越しに、身を乗り出すような格好で中をまじまじと覗き込んだ。

ここ、一、二日の間に生まれた新生児なのだろうか。全身真っ赤になった赤児が、保育器の中ではすやすやと眠っている光景を目の当たりにした。まだ何ものにも毒

されてはいない純真無垢な彰男の子が、そこには紛れもなく存在していた。それを見た瞬間、到底言葉などでは言い尽くせないほどの感動を覚えた。

そのすぐ目の前では、あまりにも小さく紅葉のような手が時にピクピクと可愛らしく動いていて、目の中に入れても痛くないとはこのことを言うのかと、しみじみ実感したものだ。そのあまりの精巧さに、彰男は思わず息を飲んだ。しかもそれは自らのDNAを受け継いだ我が子なのだと思えば、改めて悟ると、目の前の子には特別な感情が沸いてきた。その子が愛おしくて、何とも仕方なくなってきた。母胎からこの世に産み落とされ、自らの力のみで生の営みを始めているということの現実、そして神秘さ。いつまで見ている、決して飽きるといふことはなかった。

我が子を熱い眼差しで見つめているうちに、彰男はふっと、新たに生まれ変わった己を見ているような錯覚に襲われてきた。すでに三十数年来この世に生きているのだが、目の前に居る我が子が次世代を担う、あるいは自分に取って代わる分身であるかのような存在に思われてきた。生まれてこの方経験し得なかったような感動と達成感、ないし充実感を味わったとも言えよう。否別の見方をすれば、それは少なくとも、後世に自分の生きた証を残し得たことになるのかもしれない。産みの苦しみを味わったのは、妻のほうではあったけれど。

日々めまぐるしく変わる子どもの成長は二人にとって何よりの楽しみで、かつ明日への活力源ともなり得た。このような状態が、これから先未来永劫続いていくものと、そのときは信じて疑わなかった。だが後になって振り返ってみると、そういったところに心の隙、ないし盲点があったと言えなくもなかった。

慣れというのは、何と恐ろしいのだろう。初めのうちこそお互いに遠慮があって相手を思いやる気持ちが格段に強いのに、それが薄れてくると自己中心的な行動が目立ち始め、結果、知らず知らずのうちに相手を傷付けてしまっているということが往々にして起こり得た。それは、いつの頃からであったのだろう。妻の行動に異変が生じ始めてきたのは。それを早い段階で察知できれば良かったものを、忙しさにかまけて、日々の生活に追われて彰男は見逃してしまっただけのいがけなかった。すでに後の祭りという他はなかった。

妻は、いつしか二人の愛の巣であるマイホームには脚が向かなくなっていて、それとは裏腹に実家に入出入りする機会が多くなっていった。仕事で共に帰りが遅くなるゆえ、救いの手を実家に求めている風なのは薄々彰男にもわかっていった。それは



決して悪いことではないのだが、そうしている間に、二人の間に知らず知らずのうち溝が深まっていったということになるのだろうか。

元々は他人同士なのだから、いつもいつも上手くいくとばかりは限らない。時に喧嘩をしたり、そうかと思えば仲直りをしたりと、いろいろあって当然なのだ。そういうことを経て、赤の他人だった二人が徐々に夫婦として熟成していくのだとは、先輩から教わった教訓だ。

ご多分に漏れず彰男も、いずれはそうなるものと高をくくっていた。結婚すれば、それで半ば安泰だと思っていた。ところがその予想は見事に外れ、結果的に離婚という最悪の結末を迎えるに至った。その代償は、あまりにも大きかったと言える。最終的な結論が出るまで、およそ二年の歳月を要したことになる。男と女の関係ほどこじれると厄介で、複雑なものはない。それはあるときを境に思いも寄らぬ方向へと発展し、歯止めも効かず、例えて言うなら底深い海底へと沈んでいくまさにあるの沈没船と同じ運命にあるとも言えようか。

こうなるともう、どんな手立てをしたところで元に戻るものではないことを、彰男は身を持って体験した。手を尽くせば尽くすほど、逆にそれは泥沼へはまり込んでいってしまうという悪循環を繰り返した。今後のことで話し合いを持つと、妻を、何度マイホームに来るよう促したかはしれない。けれどもその誘いにはほとんど応じてくれず、彰男の努力の甲斐も虚しく、二人の仲は益々冷え切っていった。事が発覚してから、約一年間近くの別居状態。もはや気持ちが自分に無いと悟ると、彰男は次なる段階へ事を進めていかざるを得ないと、新たな準備を模索し始めていた。

我が子に会えなくなることなど、誰が想像し得ただろうか。悲しいかなその現実には否応なく彰男に襲い掛かってきて、一時期居ても立っても居られないほどの精神的ダメージを受けた。

常日頃、普通に会えていたものがあるときを境にいざ会えなくなってしまつと、その反動として、無性に会いたいという気持ちが沸き起こってくるものだ。

(娘は今頃、何をしているのだろうか。父親が居ないことを、果たして気が付いているのだろうか)

脳裏には、子どもの面影が再三再四浮かんで消え、消えてはまた、浮かんできた。あるときなどは子どもが、夢の中で彰男に執拗に話しかけてくることさえあった。

正式に離婚が成立したのは、結婚四年目を迎えた春のことだ。これまでとは一区切りを付け気持ちをリセットするまでに、およそ数ヶ月間ほど要したことになる。新たな生活を、改めて確立する必要があった。その頃彰男はすでに三十九歳になっていて、第二の人生としてやり直しを図るのには、ほぼタイムリミットに近かった。『四十にして惑わず』とは、よく言ったものだ。その格言とはまるで逆行するような不遇の身に時に焦り、身の振りようを考えざるを得ない事態に直面していた。独り身とは何と寂しく、そして空しいものなのだろう。彰男はしみじみとそれを肌で感じ取っていた。地震、津波で家族を失った被災者が不可抗力でそうなったというのなら、彰男の場合は、自らの原因によるところが少なからずあった。どちらも、最愛の家族を失ったことに変わりはないのだが。

今更ながらに、失ったものの大きさを思わずにはおれなかった。暖かみのある家庭の雰囲気とはおよそかけ離れた、何か寒々とした空気が辺りには漂っていた。

彰男はふっと、前方に目を向けた。すぐに掛時計が視界の中に入ってきて、そのうちの、秒針の動きにやけに引き付けられた。普段は見過ごしてしまっているのに、そのときばかりはその規則的な動きに目を奪われ、不思議と安らいだ気持ちになっていくのだった。萎えて、精神的に弱り果てた体を癒してくれるに有効なものは、ひよっとすると時間の経過ではないのか、ふっとそんな気がしてきた。

(そのうち、気も晴れてくるだろう)

彰男はそう思い直すと、日差しが照り付ける戸外のほうへ、ゆっくりと歩き出した。

## パートナー

週末が近づくにつれ、彰男の気持ちは自然と高ぶっていった。男女が一堂に会して相手を見つける出会いパーティーなるものに、時に参加することがあったからだ。その会場となる場所はほとんどが地元だったが、時に企画が期待できそうだと、遠くは近県にまで足を伸ばすことさえあった。

(今回は、自分に合う女性が参加してくれているだろうか)

彰男にはそのことが最大の関心事で、会場入りする度に、まずはその事が気になった。が、その一方で、自分を冷ややかに見つめているもう一人の自分が居るのも事実だった。何で今更こんなことをしているんだろう、と思うと、一気に気が滅入った。

車は、やがて会場付近までやって来た。駐車場に車を預けると、彰男はやや緊張した面持ちで指定された会場へと歩き始めた。近づくにつれ、何処からともなく女性の甲高い声が耳元に聞こえてくる。

受付で手続きを済ませると、幾らか手持ち無沙汰になった。参加者の中には、友達連れで来ている人も何人か見受けられる。

「それでは、目の前の人と五分間話をしたら、男性側は時計回りに廻って、次の女性のところに移ってください」

司会者から説明を受けると、続いて参加者達は一斉に会話を始めた。決められた時間内に必死に自己アピールをして、相手に印象づけようとする各参加者。そうかと思えば、まったく会話が弾まない人と実に様々だ。

この日彰男は会に参加していながら、どこか醒めた部分があった。不思議と、周りを冷静に見渡せたのである。それは裏を返せば、参加者を見た瞬間、今回は意中の相手が居ないと、彰男の鋭い嗅覚が嗅ぎ取ったからに他ならない。

「はい、それでは続いてフリートークに入ります。これはという相手のところに移動して、話を始めてください」

始めのうちこそ動きが鈍っていたものの、一人立ち二人立ちしていく状況に釣られて、他の参加者達も移動を開始した。会は、いよいよ終盤に差し掛かるうとしていた。その日女性の参加者は七名だったが、その中で彰男が辛うじて好感の持てた相手は、一人だけだった。

「それでは、発表します。今回、目出たくカップルが誕生しました。男性三番、女性七番です。おめでとうございます。では、その場にお立ち下さい」

司会者からの呼び掛けに、二人は満面に笑みを浮かべその場にすつくと立ち上がった。他の参加者達からは、一斉に羨望の眼差しが注がれる。この場に及んでは、明暗がはっきりと別れた形となった。どう足掻いたところでこの現実を替えようがなく、敗者は、悔しさと共にいくらか惨めな気持ちにさせられた。

彰男は、このたまらなくどうしようもない気持ちを、誰かに受け止めてもらいたいと切に思った。カップルになった二人を横目に、他の参加者達は足早に会場を後にするばかりだった。

日曜日の、朝になった。昨日の出会いパーティーでは生憎上手いこといかず、彰

男の気持ちは沈みがちだった。そのもやもやとした気持ちを、何とか断ち切りたいとも思った。戸外に飛び出し、新緑が眩しい中に身を置いているうちに、彰男の脳裏に、ふっと故郷の懐かしい風景が鮮やかに浮かび現われてきた。咄嗟に、ドライブかたがた実家に帰ってみよう、という気になった。考えてみると、震災後道路が土砂で寸断され、しばらく帰る機会を逸してもいた。

いざ、幹線道路を走り出すと、すぐに獣道の迂回ルートを通る羽目になった。走っている最中、何ヶ所か崖崩れを起こしているところにも出くわして、まだ復旧工事が手付かずのままになっていることを目の当たりにさせられた。

走行距離が倍以上になったうえ悪路を走らされたことで疲労感が増し、必然的に、自宅到着は遅くなった。午後からの出発だったこともあるが、時刻は十八時を過ぎていた。

「お帰り。…夕飯、できてるよ」

玄関先に立つと、母親がひょっこりと奥の方から姿を現わし出迎えてくれた。すでに夕飯の準備が出来ていることに、久しぶりの母の愛情を感じたものだ。着替えもせず台所に入ると、空腹ゆえ、母の手料理を腹一杯に食べた。

食事が済み、その後おもむろに自分の部屋まで行き、机の前に座る。運転の疲れが残っているせいか、頭がスッキリとはしない。昨日の出会いパーティーでの一連の光景が後味の悪いことに残像となり、再び、脳裏に蘇ってきた。それと重なり合うように浮かんでくる、つい今しがたの母親との食事風景。年老いた母親と、息子。これから先の、行く末を暗示しない訳にはいかない心境に追い込まれてきた。

（母親とこうして一緒に居られるのも、あと何年間なのだろう）

彰男の中に、ふっとそんな考えが浮かんできた。そのうち目頭は、涙で潤み始めてきた。この先、己の身に何らの変化が起きなければ、いずれは一人孤独の人生が待ち受けているであろうことはおおよそ想像が付いた。不運にも未婚であったときの状態に逆戻りしてしまったのだが、彰男には何とも頭の痛いことだった。結婚生活が上手くいってさえいれば、そこに新しい家族が加わり、世代交代を感じさせるような雰囲気の中日常生活が営まれていたはずだったのに、哀しいかな現風景には、それが無かった。

（今後、何とかしなくてはならないな）

切実に、そう思った。

『命あるものは、いずれは死ぬ』

すべての生き物に共通する宿命なのだが、それだからこそ人間は、本能的に自分の分身をこの世に残そうとその手の行動を起こすのではないか、とも考えてみた。コンピュータの前に座を占めると、彰男は改めて自分自身を奮い立たせるように、一心不乱にキーボードを叩き始めた。

## 盛夏

震災からおよそ四ヶ月余りが過ぎ、それに伴う痛みも、徐々にではあるが和らぎかけてきていた。とあるライブハウスに出掛けたのは、そんな折の週末のことだ。昔一世を風靡したシンガーソングライターが来るからと言うのでぜひ聞きたいと、以前からチケットは買い求めていたのだ。

当日、足取り軽く地下へ通じる階段を降りていくと、薄明かりの会場は、すでにほぼ満席に近い状態になっていた。司会者の挨拶に続いて、中央のステージにはお目当てのアーティストが姿を現わした。顔を見た瞬間、咄嗟に彰男は啞然となった。何故なら、昔の面影がそこには全く無かったからなのだ。考えれば、それは無理からぬことだった。すでにあれから三十数年も経っていたのだから。時が流れたことを痛切に感じない訳にはいかなかった。そのあと彼女はピアノまで歩み寄り定位置に着くと、過去のヒット曲を静かに歌い始めた。そこで彰男は、再び驚かされた。昔のあの澄み切ったような歌声とは、似ても似つかぬほどのだみ声だったからだ。彼女の私生活が、垣間見えるような気がした。

赤や緑、青色の照明が、奏者を鮮やかに浮かび上がらせている。奏者に注がれる、観客からの熱い眼差し。その眼差しと奏者からのエネルギーが共にぶつかり合い、会場内のボルテージは徐々に上がっていく。老いも若きも、一緒の空間。ある女性から彰男の元にメールが入ったのは、コンサートが終わった次の日のことだった。

「時間が合えば、また一緒にコンサートを聞きに行きましょう」

それは昨夜、彰男のすぐ隣の席に座っていた女性からのものだった。彰男のほうから声を掛けたのだが、話すと、彼女も今回のアーティストの大ファンでかつ同年代だということがわかり、その日は、共に盛り上がったものだ。何ヶ月かメール交

換をしていくうちにお互い惹かれ合い、遂には、相手の気持ちを捉えるまでになった。適齢期をかなり過ぎて幸運を手に入れられたことは、不幸中の幸いと言えたかもしれない。諦めず行動を起こしていれば、やがてはこういう好機にも恵まれるのだということ、身を持って実感した次第なのだ。

振り返れば、これまでの彰男は一人殻の中に閉じこもって、八方塞がりになっていただけは否めない。それゆえに視野狭窄となって、独り孤独のうちにもがき苦しんできたということが言えただろう。

「実は、私もバツイチなんです」

彼女からは、意外な事実が打ち明けられた。それを聞いて、好みや経歴までもが似ている、彰男は咄嗟にそう思った。すると不思議と仲間意識のようなものが芽生え、彼女を、ごく身近な存在に感じられてくるのだった。

二人が初のデートを楽しんだのは、八月中頃、週末の土曜日である。遠距離ゆえこれまででは電話やメールでのやり取りが主だったが、遂に逢うときがやって来たのだ。彼女は現住所が東京で、コンサート会場で初めて会ったときには、たまたま福島に帰省していたときだったのだという。この日が来るのを、お互いどれほど待ち望んでいたことか。

その日、彰男は始発の高速バスに飛び乗ると、約三時間ほどを掛け、終着点の東京駅に着いた。地方などは、およそ比喩ものにならないくらいにそこは人の波でごった返していた。バスから降りると、待ち合わせ場所の正面玄関方向に向かって歩き始めた。心臓の鼓動が、いやが上にも高鳴っていく。

数十分後、待ち合わせ場所の正面玄関に着いた。辺りに目配せしながら、半ば不安な気持ちで、彼女が現われるのをただひたすらに待ち続ける。人の往来が、相変わらず激しい。

遂に、約束の時間がやってきた。が、肝心の彼女の姿が、まだ見えはしない。

(もしかして、来ないのだろうか?)

よからぬ考えが頭の中を駆け巡っては、なお一層不安は募ってくる。

(まさか、約束を破るような人とも思えないが…)

良いように解釈しては、自分で自分を慰めてみる他はない。そのうち、突然背後から彰男の名を呼ぶ声がした。その声に振り向くと、丸眼鏡を掛け、髪をショートヘアにした女性と目が合った。

「あつ、佐野さん」

彰男が応じ、二人はそこで落ち合った。その頃時間はちょうど昼時になっていたこともあり、二人は、駅ビル内の食堂街に向かうことにした。

どれほど歩いた頃だろう。雰囲気の良い店構えのレストランが、ちょうど目の前に姿を現わした。

「あそこで、いいですか？」

「ええ」

彼女に確認を取ると、さっそくその店内へと入った。中は昼時とあって、ほぼ満席に近い状態だ。あちこちでは、賑やかな会話が飛び交っている。ウエイトレスがすかさずやってきては、空席へと案内する。

「今日は、来るとき疲れなかったですか？」

「いやっ、大丈夫でしたよ」

顔を見合わせお互い笑みを浮かべたところで、ようやく緊張の糸が解れてきた。数週間ぶりの再会となったが、初めて会うときのような新鮮な感覚が、共にあった。

「：これから、池袋にある水族館にでも行ってみますか？」

彰男は店を出ると、そう言って彼女を次なる場所に誘ってみた。

およそ一時間もすると、目的地に着いた。海の生き物たちの、そこは宝庫だった。館内は、子ども連れの家族でごった返している。それに混じって、さらに中へと入っていく。

珍種の海水魚など多様な生き物を目の当たりにしながら暗闇の世界に遊んでいると、あつという間に小一時間ほど近く経った。ちょうど館内を、一巡したところだった。時刻はその頃、十五時を過ぎようとしていた。彰男はふっと、帰りの時間が気になり始めた。

「ところで、近藤さん。今日は、まっすぐ福島には帰るんですか？」

ちょうど出口付近に差し掛かったところで、彼女がさも彰男を引き留めるかのような眼差しで囁くように言った。

「いや、東京に泊まろうかと思ってるんですが：」  
すると彼女はすかさず、

「もし良かったら、狭いですけど、私のところに泊まりませんか？」

まさか彼女の口からそんな言葉が出てくるとは、思ってもみなかった。一瞬耳を

疑ったが、顔を見ると、どうやら真顔らしい。

「：それじゃ、そうさせて貰ってもいいですか？」

好意を無にするのも悪いと思い、彰男はそれを、素直に受け入れることにした。

「じゃ、狭いですけど、それでも良かったらどうぞ」

まさかこんな展開になるとは、予想だにもしていなかったことである。

「済みません」

彼女に従って、一緒に付いていくことにしたのである。夕闇に包まれた街中を歩  
きながら、彰男の気持ちは次第に高ぶっていった。

電車に揺られること三十分もすると最寄りの0駅に着いて、そこから、さらに団  
地の中を二十分ほど近く歩いた。東京というイメージからはほど遠い、閑静な住宅  
街が目の前には広がっていた。

メインの通りを左に折れ、さらに中へと入っていく。やがて目の前には、彼女の  
住むマンションが現われた。

「この建物の、五階です」

彼女はそう言うと、さほど疲れた風もなく急々と階段を上がり始めた。その後を、  
やや遅れて付いていく。水族館を出てからもろの店でショッピングを楽しみ、  
そのあと夕食も済ませたので、時間は十九時を過ぎてしまっていた。彼女はカギを  
開け、先に中へ入っていく。

「済みません。お邪魔します」

その後が続いて、彰男も入った。彼女は、隣の部屋で着替えでもしているのか、  
なかなか姿を見せない。その間彰男は、テレビが置かれた部屋で、静かに座って待っ  
ている。今この瞬間、彼女の部屋に居るということ自体がまだ信じられない風なの  
だ。と、そこで戸が開く音がした。

「お茶とコーヒー、どっちがいいですか？」

彰男の背後から、柔らかな彼女の声が出た。

「それじゃ、コーヒーお願いします」

静寂な空間が、そこには広がっていた。CDの穏やかな音色が、耳には心地よい。

「でも今日は、いろいろありがとうございます」

彼女はそこで、改めて礼を言ってきた。

「とんでもない。こちらこそ急に部屋に泊めて貰うことになってしまって、迷惑を



掛けます」

彼女の気遣いが、彰男にはこの上なく身に染みだ。こんな幸福感に包まれたのは、かれこれ何年ぶりのことだろう、とも思った。眼下に見下ろす夜景が、彰男の目に眩しく映った。

尿意を催してきたのに我慢がなくなつて、次の日、不意に目を覚ました。辺りの光景が視界に入るも、いつもとは違う装いに、思わず戸惑った。一瞬、時間が止まったかのような錯覚に襲われたあと、彰男は、自分が東京の、しかも彼女のアパートに一泊してしまったことを今更のように思い出した。その日を境に、二人の仲が急速に親密になったことだけは疑いようもなかった。

充実したひとときは、あつという間に過ぎ去っていった。定刻が来て、バスは発着所を後にする。走り出すバスに向かって、彼女は手を振り始めた。次第に離れ行く二人。彼女は顔を歪めて、今にも泣き出しそうな気配だ。それに釣られて、もらい泣きしそうになる彰男。思わず携帯電話を取り出し『また、近々会おう』と、彼女にメールを送ってやる。その数分後、『わかった』と、彼女からはダブルハートマークの付いた返信メールが届く。お互いの姿が見えなくなるまで、最後の最後まで手を振り合った。

彰男が実家に帰省したのは、まだ残暑が残る、八月末のことだった。家に着くとちょうどその頃夕食時で、母親は食事の支度に余念がなかった。台所からは軽快に食材を切り刻む音が聞こえていて、それに誘われるように、彰男はその中に足を踏み入れた。

「：お帰り。来て早々に何だげど、外灯の電球、切れだみだいなんだよ」

息子と見るや、母親は振り向きざまにそんなことを言ってきた。彰男がその方向に目を向けると、母親の言う通り、外灯からの明かりはなかった。同居していれば、何事かが起きててもすぐに対処できたのに、離れて住んでいては、やむを得なかった。すでに、明かりの消えた外灯。目の前で、夕食の準備に忙しく立ち働く母親。その両者が、何故か彰男の目には対照的な存在として映った。

『形ある物は、いずれ朽ち果てる運命にある』

すでにわかりきった世の中の摂理なのだが、電球が切れたということの現実が母

親の寿命と重なり合い、やがては、全てがそういう運命にあるのだろうかと思うと、世の儚さを感じずにはおれなくなってきた。

母親が洗う物をする音でふっと現実の世界に引き戻され、我に返った。いずれにせよ、近いうちに外灯の修理だけは済ませておかななくてはいけない、そんな思いに駆られた。

夜、彰男は、久しぶりの自室で外灯の修理の件について考えを巡らしてみた。地上、それは約六メートルほど付近に備え付けてあるのだが、これの修理となると電柱に梯子を掛け、そこまで登っていかなくてはならなかった。それ自体はさほど難しい作業でもなかったが、運の悪いことに数ヶ月ほど前知人の引越し作業で肩を壊して、四十肩を患ってしまったのである。この手の作業は二人でしたほうが断然効率が良いので、彰男は、咄嗟に隣の伯父を思い出した。が、最近の伯父ときたら歩くのも心許ない状態で、頼むのには、いささかのためらいがあった。まだまだ若いと思っていたのに、いつの間にか、確実に歳は取っていたということになる。八十歳をすでに過ぎていたが、他に頼む当ても無いので、取り敢えずは声を掛けてみることにした。

その夜、彰男はさっそくそのことを言い隣りの伯父宅を訪ねた。玄関を開けると、ガラス戸越しに伯父夫妻はちょうどその頃テレビを見ながら寛いでいる最中で、そんな中目の前の引き戸を開けた。

「こんばんは。実は、外の外灯が切れで、近々直そうがど思っただけど…」

外灯の具合と修理の件について言及してみると、

「そうがい。じゃあ、いづ直すんだ？」

幸い伯父のほうから、手伝ってくれそうな案配の返答が返ってきた。

「それじゃあ悪いんだけど、今週の土曜日あたり、お願いできる？ また帰ってくるがら」

作業の日取りを打診すると、

「うん、いがつぺ」

即快い返事が返ってきた。

約束の土曜日は、瞬く間にやってきた。彰男は隣の伯父宅に、さっそく出向いた。上空は、雲一つ無い快晴の日よりである。

隣の家に着き声を掛けると、伯父はその頃畑に行っているとのことで不在で、そこから、さらに畑まで迎えに行くことにした。

早朝ゆえ、冷気がいささか肌身を刺した。奥に入っていくにつれ、緑の大地が、さらに広がりを見せ始めてきた。

農道の突き当たりまで来たとき、彰男は、葉の茂みに隠れ微かに動くものを目にした。その一点を改めて注視すると、それが伯父だった。作業ズボンに下着姿のまま、一心不乱に農作業に汗して働く姿が、そこにはあった。

「おんちゃん、早くがら精が出んねえ」

作業を中断させるのは悪いと思ったのだが、彰男は、そこで大きな声で叫んだ。

「これがら外灯直そうがど思っただげど…」

静まりかえった辺り一帯に、その声は響き渡った。それを聞きつけた伯父が、そこで仕事の手を止めると彰男のほうを振り向いた。

「電柱に登んのに、梯子貸してもらえる？」

力の限り、さらに彰男が叫んだ。

「…ああ」

伯父が遠くから、頷いた。

「じゃ、先に行つてつから」

その声に、

「すぐじぎ、行くがら」

伯父が、それに返した。

備え付けの梯子を外しているところで、伯父が畑からちようど戻ってきた。

「どれ、手伝うがら」

伯父がそう言って、背後から彰男に手を差し伸べてきた。

「いやあ、こういう風に二人で持つど、楽だねえ」

彰男は伯父の年老いた後ろ姿に目をやりながら、しみじみと語りかけるように言った。

「そうが…」

頷いては、おぼつかない足取りながら前に行く伯父なのである。

(でも、二人でこんなごどでぎんのも、いづまでなんだろう…)

日頃農作業で鍛えている体ゆえ同年代の老人よりはすこぶる元気なのだが、以前

に比べるとめつきり衰えた感は否めなかった。そんな伯父を目の当たりにすると、哀しいかな先行きを案じない訳にはいかなくなってきた。可能なら、いつまでもこの作業を一緒に続けていきたいのはやまやまだったのだけれど。

新聞のお悔やみ欄には、連日のように同年代の死亡者名、年齢、住所と葬式日程。それに場所を知らせる記事、諸々が載らない日は無かった。それを目にする度、伯父にもいつ何時不測の事態が起こってもおかしくはない年齢と状況に来てしまっているのだということ痛切に感じない訳にはいかなかった。

そういう彰男の父は、すでに十三年前に六十五歳という若さで他界している。持病の心臓病が原因だったのだが、それが無ければ、まだまだ長生きしたであろうことが殊の外悔やまれてならなかった。それだからこそ実兄でもある伯父には、父の分まで長生きしてもらいたい、切にそう願った。

「でも俺も、いづまでこういふごとでぎつがな？」

身体を左右に揺すりながら、伯父がやや弱気な言葉を口にした。

「なーに、まだまだ大丈夫だって。全然問題ないよ」

そういう伯父を、彰男は後ろから元気づけるように言った。

「でも今度は、俺がこの役を引退して、お前が子どもと、この交換作業と一緒にやる番だな」

それは伯父が彰男に対して、近々の将来に期待を込めているようにも聞き取れた。順送りという意味合いからすると確かにそうあらねばならない、彰男はしみじみと感じた。

(そうだね。そろそろ、俺も身を固めるよ)

言い終えた後彰男の脳裏に、ふっと彼女の優しい面影が浮かんだ。

今回の電球の交換作業は二人で協力して事を進めたお陰で、無事に終えることができた。まるでそれは、息を吹き返した人間を見ているような気がした。命が繋がった、と感じた。震災後、彰男はこうした同じような光景を、町の至るところで見かけたのである。二人は、あたかも希望の光でも見るように、外灯の灯りに再び優しい眼差しを向けた。

(了)

佐藤 義弘

昭和三十六年生まれ  
千葉大学工学部卒業